

市民のみなさんに
知ってほしい

松山市で絶滅に近づいている 生きものたち



レッドデータブックまつやま 2012 概要版



目 次

1. はじめに	
2. レッドデータブックとは	1
3. 絶滅危険性を判断するーカテゴリー区分ー	1
4. 絶滅に瀕した生物の現状ー選定結果一覧ー	3
5. 絶滅に近づいている生きものたちー分類別一覧表ー	4
6. 松山市内から絶滅した生きものたち	5
7. 身近に居る絶滅危惧種たち① 奥山と源流	7
8. 身近に居る絶滅危惧種たち② 山すその山村	9
9. 身近に居る絶滅危惧種たち③ 溜め池	11
10. 身近に居る絶滅危惧種たち④ 泉と水路のある田園	13
11. 身近に居る絶滅危惧種たち⑤ 町中の自然林と川の中流	15
12. 身近に居る絶滅危惧種たち⑥ 河口の干潟とヨシ原	17
13. 身近に居る絶滅危惧種たち⑦ 砂浜と海	19
14. 何が生きものを絶滅に追いやるのだろうかー植物の視点からー	21
15. 生物多様性と昆虫	26
16. 善意が生み出すもう一つの生態系破壊ー失われゆく地域固有性ー	29
17. 外来魚の影響ーオオクチバスのいない水辺を目指してー	32
18. 生きものをよく見て、よく知ろう	34
19. 私たちにできることー生きものを絶滅から救う簡単な方法ー	37
20. 外来生物法	40
21. RDBまつやま2012掲載種一覧	41



❁ 絶滅に瀕した生物の現状 — 選定結果一覧 —

『レッドデータブックまつやま2012』の全掲載種は732種であり、『レッドデータブックまつやま2002』（以下、2002年版）よりも182種も増加しました。この増加の主な要因は合併により旧北条市の高縄山など山岳および旧中島町の島しょ部において新たな希少種が追加されたことですが、自然林や自然海岸の減少だけでなく、耕作放棄地の増加、草地や雑木林の管理不足による遷移進行、溜め池・水路の改修工事、外来種の拡大なども考えられます。とくに私たちの住んでいる町のそばにある里山、田んぼや畑、溜め池、水路、河口などにすむ生きもので絶滅の危険性が高まっていることは心配です。

「絶滅」および「野生絶滅」は48種から51種に増加しました。新たに追加された種は、哺乳類のニホンカワウソ、昆虫類のキイロサナエ・スジゲンゴロウ・クロシジミ、植物のクモノスジダ・コタニワタリ・サンショウモ・コウホネ・タコノアシ・ヒナノカンザシ・ミミカキグサ・ホザキノミミカキグサ、キノコ類のエヒメウスバタケの13種です。一方、2002年版で旧松山市内では「絶滅」とされた種のうち、昆虫類のマルクビツチハンミョウ、海岸動物のミドリシャミセンガイ、貝類のコオロギ・オオウスイロヘソカドガイ、植物のミズワラビ・ナガサキシダ・イヌノフグリ・ノハナショウブ・タチハコベ・アサザの10種の現存が確認されて「絶滅」から外されました。

新規に掲載された種は212種で、うち「絶滅」が6種、「絶滅危惧Ⅰ類」が66種、「絶滅危惧Ⅱ類」が36種、「準絶滅危惧」が54種、「情報不足」が50種です。

ランクが上位に変更された種は121種ですので、これらは近年の10年間に絶滅危険性が高まった種といえます。

全 種 数	732種	2002年版は550種
新規に掲載された種	212種	
ランクが上位に変更された種	121種	10年間で絶滅危険性が高まった種。このうち前回、「情報不足」だった種が、その後、確認情報を得て上位ランクに変更された種は74種
ランクが下位に変更された種	69種	10年間で絶滅危険性が低下した種。この多くは市町村合併などにより新たな生息・生育地が確認されたことによる。
ランクに変更のない種	330種	依然として同様の絶滅危険性が継続している種
ランク外に変更された種	30種	

松山市内から絶滅した

※このページには松山市内の絶滅種 51 種のうち 18 種を掲載しています。全絶滅種は



ニホンオオカミ 明治時代となって山野の開拓や飼い犬の狂犬病などの感染などで急減。明治初期頃に北梅本町で捕獲されたと思われる頭骨が愛媛県総合科学博物館に保管されているのみで他の記録はない。



ニホンカワウソ かつては日本各地に広く分布していたが、海岸の開発や毛皮目的の狩猟などにより急減。松山市内では昭和 30 年代に重信川下流でモクスガニを捕食している姿を目撃されているが、その後は姿を消した。



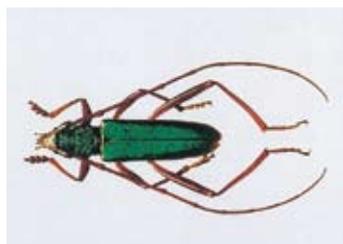
タガメ 蛙や魚をつかまえ消化液を獲物の体に注入して、組織を溶かして吸い取る。「水中のギャング」と呼ばれ、水の中では怖いもの知らずの存在であるが、環境変化には適応できなかった。



ゲンゴロウ タガメと同じく魚やオタマジャクシを食べ、成虫は活発に泳ぎ回る非常に元気な昆虫であるが、環境変化には適応できずに、松山市内では絶滅したと考えられる。



ハマズズ 海岸やまれに河原の砂浜に生息する。薄茶色にまだら模様があって砂の上に行けば見つけにくい。自然の砂浜が少なくなったため、市内の海岸からは姿を消してしまった。



アカアシオオオカミキリ 体の背面がきれいな緑色をしていて、触角や脚は赤い大形のカミキリムシ。カブトムシやクワガタムシのように、夜になるとクヌギやアベマキの樹液を吸うために集まってくる。



オオウラギンヒョウモン 大形のヒョウモンチョウ。幼虫は草原や堤防でスマシを食べ育て育つ。草原や堤防植生の管理がされなくなったので、スマシが育たず、松山市内だけでなく、愛媛県からも姿を消した。



キイロサナエ 幼虫は泥質の多い砂泥底を好むので、河川の中流域や水路などに発生するが、このような環境は改修などでしばしば改変を受けるので、松山市からは絶滅してしまっただ。



ルイスハンミョウ 海岸の砂浜に生息し、おもにヒメハマトビムシなどの小形節足動物を食べている。特に砂浜海岸は防災上の理由から環境改変が大規模に行われるので、全国的に減少している。

身近に居る 絶滅危惧種たち

1



① ヤマネ【絶滅危惧Ⅰ類】

森林にすむ体長7cmほどの日本固有種。哺乳類だが冬眠する。夜行性でももに樹上生活し、果実・昆虫などを食べる。石手川上流の山地に居るが伐採などで孤立した小集団がほそぼそと残存している。



② クマタカ【絶滅危惧ⅠA類】

トビよりやや大きく、幅の広い翼と冠羽をもつ。山地の森林に周年生息し、ノウサギ、ヘビ、ヤマドリ、リスなどを捕食する。本種は豊かな自然環境の指標とされる。



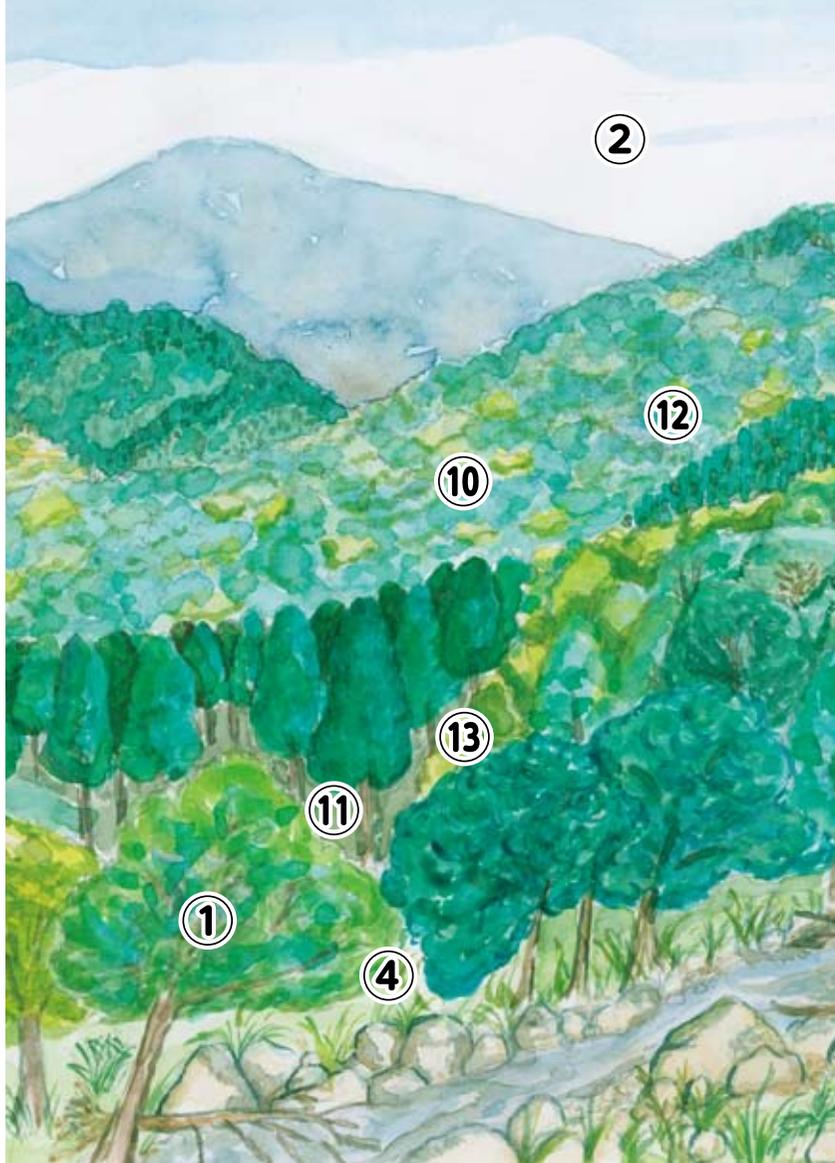
③ アカショウビン【絶滅危惧Ⅱ類】

全身が鮮やかな赤橙色で、くちばしは太くて赤い。「キョロロ…」と鳴く。山地の漂流などうっそうとした環境を好む夏鳥。サワガニや昆虫など小動物を捕食する。



④ タカチホヘビ【絶滅危惧Ⅱ類】

森林の林床に生息する。7～8月に産卵する。背面は茶褐色で、全長300～600mm。夜行性で乾燥に弱く、地中や石・朽木の下などに潜んでいることが多いため、普段は人目につかない。



身近に居る絶滅危惧種たち①

奥山と源流



⑤ イシツチサンショウウオ【絶滅危惧Ⅰ類】

深い森の源流域に生息する四国固有種の両生類。体色はナス紺色で全長150mm以上。幼生は水中越冬する。幼生は外鰓を持ち、半年から1年くらいで変態して上陸する。



⑥ エゾハルゼミ【絶滅危惧Ⅱ類】

北方系の森林性のセミで、松山市内では明神ヶ森や高縄山の高所にのみ生息している。初夏に「ミョーキン、ミョーキン、ケケケケ…」という特徴的な声で連続して鳴く。



松山市内には高縄山（986m）を始めとして、北三方ヶ森、福見山、引地山など標高1000m前後の山があり、頂上近くはブナ林など自然の森で覆われ、谷間にはケヤキなど渓谷林が発達し河川の源流域ともなっている。そこは大昔から数多くの生きものがすみ続けている野生生物の宝庫である。しかし林道建設や伐採、人の盗掘などによって森の中でひっそりと暮らしていた生きものたちが脅かされている。



⑦オオチャイロハナムグリ【準絶滅危惧】
幼虫は樹洞の中の朽ちた部分を食べる。雄は甘い独特の匂いを出すので、発生木の近くを通るだけで発見できることがある。樹洞ができるような大木、古木の減少で、少なくなった。



⑧フタスジカタビロハナカミキリ【準絶滅危惧】
幼虫はヤマシャクヤクの根を食べ、成虫はヤマシャクヤクの花に集まる。発生は高標高地の自然林内に限られるため、松山市内では発生場所も、発生量も少ない。



⑬コウヤクマンネンハリタケ【絶滅危惧Ⅰ類】
森の中の倒れた木から生える硬いキノコで、樹木の表面に張り付くように発生する。以前は山林の作業場などにもみられたが、全国的に減少している。



⑫イナモリソウ【絶滅危惧ⅠB類】
山地の木陰にひっそり生える小さな多年草。葉はややハート形で対生し両面に短毛を密生する。初夏に淡紫紅色の花をつける。生育地が限定されているうえ、森林伐採や採取で減少している。



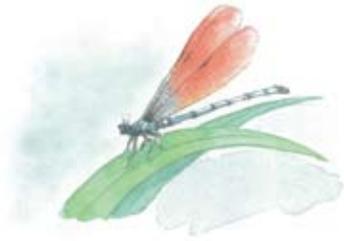
⑪クマガイソウ【絶滅危惧ⅠB類】
山地の林内に生育するラン科の多年草。2枚の葉が扇形に広がり、初夏に袋状の独特の花をつける。盗掘の危険性がきわめて高く、愛媛県の条例で採取が禁止されている。



⑩シコクカッコソウ【絶滅危惧ⅠB類】
山地の林内に生育する多年草。サクラソウ科の仲間で、花は初夏に咲きピンク色で美しい。盗掘の危険性がきわめて高く、愛媛県の条例で採取が禁止されている。



⑨イヨギセル【絶滅危惧Ⅰ類】
大洲市出石山で発見された愛媛を代表する陸貝。殻は2cmほどで細長く、光沢のある黄褐色で細かい縦筋がある。広葉樹林内の岩礫の間に生息するが個体数はきわめて少ない。

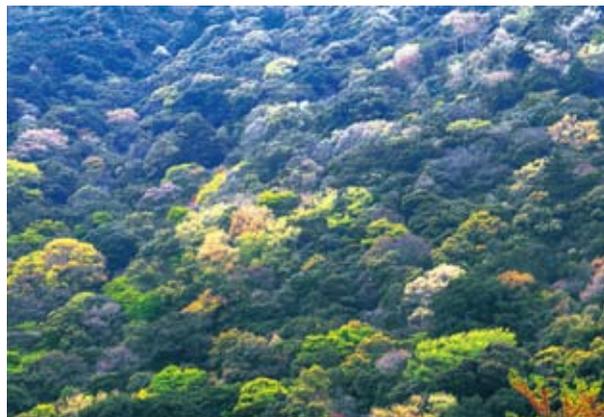


生物多様性と昆虫

酒井 雅博（昆虫類分科会座長、愛媛大学ミュージアム）

地球上にはバクテリアから脊椎動物までさまざまな生物が存在し、これらは複雑につながりあって、歴史的にも、現実的にもひとつの地球生命系を作り上げていると理解できます。私たち人間（＝ヒト）も当然その一員ですので、好むと好まざるとに関わらず、非常に多くの生物と直接的、間接的なつながりを持って生きてきました。もちろんこれからもずっと生きていかなければなりません。ところが近年、さまざまな人間活動の影響で多くの生きものが絶滅したり、絶滅危惧状態になっています。絶滅は生物多様性が損なわれていくことだけでなく、複雑につながりあった生命系のリンクが途切れることであり、インターネットの回線があちこちで寸断されるのと同じで、絶滅種の周辺で多くの種が影響を受けることとなります。この「多様で複雑な生物のつながりが細断化され、単純化していくことは、人間の生存基盤が弱体化していくことと同じである」ということにやっと気付いたのが「生物多様性保全」の考え方の発端になっています。

生物多様性 (biodiversity) という言葉が生まれたのは20数年前のことで、きちんと定義されてまだ20年にしかありません。2010年に名古屋でCOP10（生物多様性条約第10回締約国会議）が開かれたので、この言葉を「知っている」とか「聞いたことがある」人たちが少しずつ増えてきていますが、それでもまだまだこの言葉が社会に浸透しているとは言えません。しかし生物多様性の大切さは国の行政府は十分に分かっているので、生物多様性国家戦略を発表したり、生物多様性基本法という法律を定めて、生物多様性保全の啓



暖地性の多様な生物を育む照葉樹林